

考古学的器種名の訳語選択について

—「杯（つき）」の中国語訳を例に—

呉 修喆

I はじめに

多言語版奈文研収蔵品データベース (https://jmapps.ne.jp/nabunken_world/) の整備において、もっとも悩んだ用語の一つに「杯（つき）」がある。現在は、「浅陶碗（qiǎn táowǎn）」と中国語訳している。しかし、原語は漢字一文字であるのに、なぜ訳語では三文字になったのか、ほかにふさわしい訳し方はないのかなど、いろいろ疑問を浮かべるかもしれない。本稿は、訳語選択の観点から、考古学的器種名の多言語化をめぐる考え方について解説するものである。

II 考古学的器種名の実態

翻訳にとりかかる前に、器種名がどのように付けられたかについて情報を収集してみる。器種名を付ける前提として、まず、〈かたち〉の認識が必要である。考古学における〈かたち〉の認識には、「個体差の識別」と「有意性のあるまとまり」との2つの作業があると知られている。そのどちらも知識と経験にもとづいた感覚的な方法でおこなわれることが多かったが、70年代以降は数学的な認識を用いた型式設定もみられるようになった。考古学的器種名は、後者の「有意性のあるまとまり」に該当するため、研究者の知識と経験の差に負う部分が大きだけでなく、研究者ごとに線引きが異なる場合もありうる（藤尾1993）。とくに、歴史的親縁性を考慮した分類をおこなうには、製作技法・産地・系譜に起因する差異と、高台や把手の有無など付帯する形態の差異とが混在するのが現状である（奈文研2010）。したがって、考古学的器種名は、主に「作業上の分類記号」として機能する。

III 文化財多言語化の方向性

このような実態と現状を踏まえたうえで、「幅広く知ってもらう」「展示品に関心を持ってもらう」「より深く理解してもらう」という文化財多言語化の目標に応じ、翻訳作業の

スタンスとして、主に以下3つの方向がある。

- ①研究者向けの場合は、研究スタイルの紹介もかねて、なるべく作業上の分類記号を保留する。たとえば、論文など専門的なテキストであれば、「杯（つき）」を訳さずに Tsuki と表記したほうが混乱は少ない。
- ②一般向けの展示・情報発信（とくに画像と実物など視覚情報が伴う場合）では、記号や専門用語を減らし、日常言語との親和性を図るように訳す。解説文においても、調査研究でわかったことを中心に記述する。たとえば、当該器物が当時の生活場面における用途などを解説し、奈良時代の宮廷社会の食生活を想像しやすいように訳す。
- ③一般向けの解説文とともに、さらなる情報または学術的知見がほしい利用者のために、奈文研が公開している刊行物（多言語化された解説シートなど含む）やデータベースのリンクを提供し、「専門的領域」へといざなう。

本稿の事例である多言語版奈文研収蔵品データベースは、2020年度におこなった平城宮跡資料館解説パネルのリニューアルに合わせて整備したものである。現在、500件ほどの収蔵品データが入っており、新たに撮影した展示品全品の写真および出土状況の写真や図面を公開している。早稲田システム開発株式会社の「ポケット学芸員」というアプリと連携することで、来館者は展示品の近くに掲示してある番号をアプリの検索欄に入力するだけで、タブレットやスマートフォンなどのモバイル端末で多言語化解説を閲覧することが可能となっている。翻訳スタイルの方向性においては上記の②と③に適し、いわば専門家と非専門家をつなげるサイエンス・コミュニケーション・ツールとしての機能を目指した。

IV 中国語に訳す際の難点

方向性が定まったところで、考古学的器種名を一般向けに訳すときに直面する難点を整理してみよう。

まず挙げられるのは、容器に対する感覚的認識の差異である。器種説明によく使われる「いわゆる〇〇形」という文言（たとえば、「鉢A：いわゆる鉄鉢形」のような）は、すなわち、「感覚的認識」によるものである。日常生活で熟知されている器形を引き合わせて照合するというのは、同じ文化圏の生活者に向けて説明する時において有用かつ簡便な方法であるが、いざ異なる文化圏に持っていくと適用できない場合がある。生活文化の違いが大きければ、照合する対象を目的語の文化圏から新しく探しあてるか、部位的形態を逐一に説明する方法に転換する必要がある。さいわい、日本と中国では、生活文化の面においてそれほど大きな差異はなく、共通的感觉にもとづいて、器種の細分に少し注意を払えるだけで、おおよその説明は通じる。

つぎに、漢字の使用も難点の一つである。中国語化の場合、同じく漢字を使っているため、日本の古器名をそのまま流用すればいいのではないか、と思われるかもしれない。実は、そこに予想外の難しさ、つまり、和語・漢字・現代中国語の複雑な絡み合いと衝突が潜んでいる。同じ漢字とはいえ、現代における考古学上の器種分類に用いられているものと、過去の日本人が実際に用いたものは必ずしも一致しない。さらに、過去の日本人がその漢字で表現していた意味と、その漢字が現代中国語の文脈において想起される機能や形態などとの間には、少なからず差異が存在する。つまり、考古学的器種分類の用字、あるいは文献等で見られる古器名をそのまま現代中国語訳として採用することはできない。

V 訳語選択の流れ

ここで、「杯（つき）」を例に、訳語選択の流れを解説する。

1 語源と字義を考察する

古代における器種名の表記は文献だけでなく、墨書土器に書かれている文字からも確認できる。たとえば、「つき」という発音は、墨書土器（平城宮跡園池SG8500出土の土師器皿A）に書かれた「都支」の墨字から知られている。『日本語源広辞典』によると、「つき」は「注ぐ」という動詞からきている。「都支十口」とあるように、使われた助数詞が「口」であることから推測すると、おそらく蓋なしの容器であろう。

漢文における「栴（杯の原字）」は、「飲酒器」または「盛羹器」と解釈されているが、器形や素材からではなく、機能にもとづいた分類だったと思われる。しかし、考古学上「杯（つき）」と分類されているのは、液体のための容器のみならず、主食用の食器も含まれているため、用途の範囲は「栴」より広い。

そして、「杯（bēi）」は現代中国語では一般的に「コップ形の容器」を表す。つまり、「杯（bēi）」にしてしまえば、現代の中国語話者が真っ先に頭に浮かぶのは円筒状の液体容器かトロフィーカップのような器形である。しかし、奈文研では、小型供膳具の「コップ形土器」に「椀」という記号を用いる（奈文研2010）。そのため、機能・器形のどちらの面においても、「杯（bēi）」という現代中国語は考古学的器種名である「杯（つき）」を一般向けに説明するのに不適切である。

2 字形衝突を避ける

平城京から出土した「杯（つき）」型の墨書土器には、「水坏」「酒杯」のような文字が多数みられる。また、木簡の表記にも「坏」と「杯」が混在している。以上の事実から、

「坏」と「杯」はいわゆる異体字であると看取できる。ならば、「杯」のかわりに、土器の材質を土偏で表現する「坏」という字を使うことはできるのか。

「坏」を選択しない理由として、まず、現代中国語の「坏 (huài)」と字形が衝突していることが挙げられる。「坏 (huài)」は一般的に「壞」の異体字として知られ、現代中国語では「壞」の簡体字、とくに「劣悪・好ましくない」という意味で常用される漢字である。一方、「つき」の意味で使われている「坏」は、おそらくpīまたはpēiと発音すべき漢字で、「坯」の異体字である。『説文解字』によると、「坏 (pī/pēi)」は「土器が焼かれる前の状態」を指す。器種名ではないため、「杯」の異体字とするのは日中共通の現象ではない。

それに、作業上の分類記号である考古学的器種名は、実用食器の位相との間に掛け違いが存在し、古代における埴・坏・盤の別と、考古学者の認識における碗・杯・皿とが必ずしも整合しない(森川2021)。考古学者によって「杯(つき)」と分類されている容器の中には、「埴」と墨書されているものがある。たとえば、「弁埴勿他人者(SK219)」と「水埴(SK19189)」は杯A、「兵衛粥 右兵／粥埴(SD3825)」と「麦埴(SK69)」は杯Bとされている。また、「埴」と書かれている墨書土器に「鍋」と分類されるもの(「石河宮／埴」山田道遺跡第4次)もみられる。「埴」と「碗」は中国語においても「碗」の異体字であるが、墨書土器などにみられる古器名の「埴」は、本来「器物の表面を漆と骨粉の混合物で塗ること、または壁を補修すること」という意味の漢字であるため、おそらく類似字形の混同による俗字であろう。これも日本の出土文字資料からみられるやや特殊な用字法であり、翻訳の際に避けるべきである。

3 現代中国語で説明しやすいように

日本では、器種名となる漢字の偏を材質とリンクする習慣があるように思われる。たとえば、陶磁器製のものは石偏の「碗」、金属製のものは金偏の「鉢」と書くことがよくあるが、それほど厳密に区別されていない。ちなみに、考古学的にいう「鉢(かなまり)」は高台付きの金属製の碗であり、仏具である。現代中国語では、材質を問わず、鉢より小さいボウル形の容器には「碗(wǎn)」の字を使う。また、土器を含めた焼き物類は一般的に「陶器(táoqì)」と通称される。そのため、奈文研のテキストでは、土師器という用語の後ろに「軟質紅陶」、須恵器の後ろに「硬質灰陶」という追加説明を入れている。過去の訳文に合わせ、「杯(つき)」を訳す際にも、「碗(wǎn)」の前に材質を明確にする「陶(táo)」を入れた。

最後に、中国の考古学的器種名と比較してみた。考古学論文の実測図や説明文と照らし合わせた結果、「杯(つき)」に類似する器形は基本的に「碗(wǎn)」と表記されていることがわかった(易2007、璋2020)。ここで注意しなければならないのは、中国考古学におけ

る「碗 (wǎn)」はあくまでも現代中国語であり、日本の考古学的用語の「碗」や、古代日本で用いられていた「碗／埴」ではないことである。

杯Aと杯Bには深形・浅形と器高の高低が存在するが、両方合わせて概括的に訳すのならば、「陶碗」だけでいいかもしれない。しかし、こうすると、土師器と須恵器の「碗」類と区別がつかなくなる。奈文研の研究者らが杯と碗を分けて整理しているという情報を保留したうえで、字形の衝突を回避し、一般向けにもわかりやすく説明するためには、「杯 (つき)」と「碗 (わん)」の訳に対し、差別化を図る必要がある。出土資料の点数からみて優勢なのは浅形のものであり、収蔵品データベースにアップされている画像と実測図もすべて浅形である。感覚的認識としては、「杯 (つき)」の器高が碗と皿の中間にあり、皿ほど扁平化しておらず、碗との差が比較的曖昧である。したがって、「深い皿」と翻訳するよりは、「浅手の碗」と訳したほうが自然である。

VI おわりに

以上のように、考古学的器種名に関わる用字法の差異を整理・検討した結果、奈文研収蔵品データベースにおける「杯 (つき)」を「浅陶碗 (qiǎn táowǎn)」と訳した。ただし、器種の細分については、「研究の進展とともに検証を重ね、分類基準を明確にしたうえで改訂していく必要がある (奈文研2010)」と言われているように、今後、「杯 (つき)」という日本考古学上の一大タクソンを文脈に沿った正確な訳を提供するためには、より多くの知識と経験を積み重ねなければならない。



図1 奈良文化財研究所収蔵品データベース多言語版 杯A (I群) 資料情報画面

参考文献

- 易立 2007「北方地区出土晚唐至宋初陶瓷器的類型与分期——以邢、定、耀州窯產品為中心」
吉林大学碩士學位論文
- 大川清・鈴木公雄・工樂善通 1996『日本土器事典』 雄山閣
- 許慎・段玉裁・許惟賢 2007『説文解字注』 鳳凰出版社
- 璋浥塵 2020「中国古代陶瓷器与金属器間の關係」 景德鎮陶瓷大學碩士學位論文
- 張玉書・陳廷敬 1958『康熙字典』 中華書局
- 奈良国立文化財研究所 1983『平城宮出土墨書土器集成』 1 真陽社
- 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部 1992『発掘調査概報22：飛鳥・藤原宮発掘調査
概報』 22 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
- 奈良文化財研究所 2010『平城京事典：図説』 柊風舎
- 藤尾慎一郎 1993「考古学における『かたち』の認識」『国立歴史民俗博物館研究報告』 53 国立歴史民俗博物館 pp.49-75
- 増井金典 2010『日本語源広辞典』 ミネルヴァ書房
- 森川実 2021『正倉院文書にみる古代食膳具の研究』 国立文化財機構奈良文化財研究所

挿図出典

図1：奈良文化財研究所収蔵品データベース（英中韓）http://jmapps.ne.jp/nabunken_world/index.html（閲覧日：2022年12月16日）